

# 教えの庭から

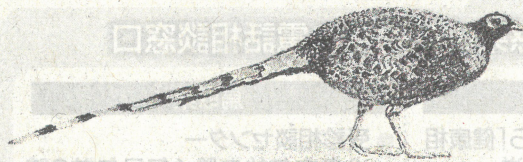
行基菩薩(ぎょうきぼさつ) (668~749年)

9年)は、「山鳥のほろほろと鳴く声聞けば、父かと思ふ、母かと思ふ」と歌われました。また、松尾芭蕉(1644~94年)の俳句に、「父母のしきりに恋し雉の声」があります。私たちは、亡き父母つまり仏様を念じていると、それが鳥の鳴き声を聞いたとき、父母の声として聞こえてきて、私たちの心の中に父母が現象してくださるのです。そして私のことや家族のことを常に思っていてくださるのがわかります。また、花が咲いたことにより、亡き父母を懐かしんだ俳句「木樨咲く父母に手合わせ懐かしむ」(中島真由美)が本紙「読者のひろば」に掲載されていました。

## 亡き父母を想う

出雲市斐川町・仁照寺住職 江角 弘道

「観無量寿経」に「心想ちの心の中に帰ってきまう歌がありますが、「限りす。易しく言えば「空」とは、「おかげさま」のことであると言えます。臨済宗妙心寺派では、「信心のこ」とば「わが身をこのまま空なりと観じて静かにすわりますよう」です。自分(わが身)は「空」であると信じます。



挿絵 平尾恵郷

「観無量寿経」に「心想ちの心の中に帰ってきまう歌がありますが、「限りす。易しく言えば「空」とは、「おかげさま」のことであると言えます。臨済宗妙心寺派では、「信心のこ」とば「わが身をこのまま空なりと観じて静かにすわりますよう」です。自分(わが身)は「空」であると信じます。

「観無量寿経」に「心想ちの心の中に帰ってきまう歌がありますが、「限りす。易しく言えば「空」とは、「おかげさま」のことであると言えます。臨済宗妙心寺派では、「信心のこ」とば「わが身をこのまま空なりと観じて静かにすわりますよう」です。自分(わが身)は「空」であると信じます。